

松井和久 著

スラウェシだより

地方から見た激動のインドネシア

アジア経済研究所

スラウエシだより

地方から見た激動のインドネシア

目次

はじめに

第1章 インドネシア東部地域開発の諸相 3

- 1 マカッサルから見たインドネシア東部地域開発 5
- 2 「加工年」から「販売宣伝年」へ 南スラウエシ州のカカオと
カシューナッツ 14
- 3 「ボトムアップ型」の地域開発計画策定過程 22
- 4 東南スラウエシ州における農業農村開発の試み 30
- 5 インターネットと情報共有 42
- 6 インドネシア東部地域への産業移転をめぐつて 49

- 7 ビアク開発構想の行方 56
- 8 インドネシア東部地域こそ輸出振興を 65
- コラム 「ありがとう」のない世界 71

第2章 経済危機、政治変動、暴力 75

- 1 マカッサルで見た一九九七年総選挙 79
- 2 マカッサルの「反華人」暴動 85
- 3 引きつづくルピアを愛す運動 93
- 4 経済危機は絶好のチャンス！ 南スラウェシ州のグラテックス2 98
- 5 「レフォルマシ」の名の陰で 104
- 6 ソーシャル・セイフティ・ネットは誰のため？ 111
- 7 忘れられた避難民 アンボンからのブトン人 117
- 8 マカッサルの「ハビビ効果」 一九九九年総選挙 125
- 9 政党はどこへ行った？ 133
- 10 スラウエシの独立・分離要求運動 エリートと住民のかけ離れた距離

- 11 蘇れ、暴動の地から平和の地へ 中スラウエシ州ポソ県 147
- コラム 学校を去ったジャワ人教師 159

第3章 島をめぐる、地方をめぐる 161

- 1 タカ・ボネラテ諸島をめぐる 163
- 2 六年ぶりにトラジャを訪れて 173
- 3 古着で潤う島 東南スラウエシ州ワンギ島 182
- 4 辺境に「楽園」があった： サンギへ・タラウド諸島にて (1) 189
- 5 国境を行き交うサンギル人 サンギへ・タラウド諸島にて (2) 198
- コラム ロティ・マロスのひみつ 205

第4章 地方分権化と地方の自立 209

- 1 動きはじめた地方分権化 214
- 2 地方首長は地方分権に目覚めたか 県知事・市長との議論から 222
- 3 気にせざるを得ない外の目 ミナハサ県のある裁判事件をめぐる 229

- 4 少しずつ始まったスラウエシの情報化 235
- 5 住民が育てたマングローブ林 南スラウエシ州シンジャイ県 242
- 6 「ブンブルダヤアン」と自立 249
- 7 動きはじめた地域間協力の試み 255
- 8 地域の自立と連帯へ向けて スラウエシ発の新たな地域開発概念 263
- 9 マカッサルで感じる経済回復の実感 269
- 10 アイデンティティ危機の克服へ向けて 276

筆者紹介

まつ い かず ひさ

松井和久

1962年生まれ

1985年 一橋大学社会学部卒業

1985年 アジア経済研究所入所

1990～92年 インドネシア大学大学院留学（アジア経済研究所海外派遣員）

1995～98年 在マカッサル国際協力事業団長期派遣専門家

1996年 インドネシア大学大学院修士課程卒業

1999～01年 在マカッサル国際協力事業団長期派遣専門家

現在 日本貿易振興会アジア経済研究所地域研究第一部研究員

E-mail: matui@ide.go.jp

（主な著作）

「東部地域開発の課題」（『アジ研ワールドトレンド』1995年8月号）

「ハビビ新体制の特徴」（アジ研トピックリポート『緊急リポート スハルト体制の終焉とインドネシアの新時代』1998年7月）

「地方分権化へ向けての課題 新たな中央＝地方関係の模索」（アジ研トピックリポート『緊急リポート ワヒド政権の誕生と課題』1999年12月）

「試練に立つ『多様性のなかの統一』 地方分権化と新たな国家像の模索」（『アジ研ワールドトレンド』2000年5月号）

スラウェシだより

地方から見た激動のインドネシア〔アジアを見る眼102〕

2002年3月29日発行©

定価（本体1400円＋税）

著者 松井和久

発行所 日本貿易振興会アジア経済研究所

千葉県美浜区若葉3-2-2 〒261-8545

研究支援部 電話 043(299)9735(販売)

FAX 043(299)9736(販売)

E-mail: info@ide.go.jp

http://www.ide.go.jp

印刷所 株式会社 三陽社

カバーデザイン 長峰亜里

落丁、乱丁はお取替え致します

無断転載を禁ず

ISBN 4 258 05102 0 C1233

地中海から太平洋まで、この広くアジアと呼ばれる地帯には幾十かの国がある。その大部分は第二次世界大戦以後古い植民地体制から脱して新興の独立国となったものである。世界の人口の半ば以上のものがここにあり、これらの新興国はそれぞれの立場に立って、建国創業の仕事に力を尽くしている。

その業は果たして障害なく着々と進んでおるか。だれもがこれに対して頭をかしげるであろう。そしてだれもがアジアは「流動的」であるという。

流動的とは何であるか。また何でないか。いくたの混みいった事態のなかを、一本の金の線が生々発展的に縫っているのも流動的である。経済は着々と成長し、政治は一つの体制のなかで徐々に整備されているような場合がそれである。

アジア諸国の大部分については、事態はこのように簡単ではない。もちろん、経済の場面には大きな発展・成長の芽生えはある。しかし、他面においてそれを抑制するものが力づよい。またおよそ発展や成長を考える場合、在来流の理解によるパターンを以ってするのが果たして正しいか、との疑問もでてくる。さらに政治体制については、イデオロギーの対立、複合民族国家における特殊なナショナリズムに伴う民族や種族間の闘争があつて、政治的安定はなかなか期すべくもない。独立国家の幼年期に伴う政治的、行政的未熟もまた考えられるべき大きな原因である。

こういう次第で、アジアが流動的であるとは、一つの混沌を意味するものといえようか。そしてその上に立っていかなる経済・社会・政治の体制が整いだされるであろうか。この意味で二〇世紀後半のアジアは世界における「問題」、いな最も大きな「問題」である。

アジア経済研究所は、まさにこの「問題」の理解に向かつて、ひたすら前進をつづけている。われわれの期するところは、まさにそれぞれの国の現実に即した精確な知識を供しよう、そしてこの大きな「問題」について静かなサーピスをいたそうとするに尽きる。設立以来すでに七九年余り、専らそういう道を歩んできたし、今後もそれに変わりはない。このシリーズは、多くの研究や調査の報告書、現地調査を土台として、アジアについての解説書・教養書たることを目標とするものである。

一九六六年三月

アジア経済研究所 東畑 精一